

二次面接で落ちたときは ESに問題がある

—では、最近の就活生の様子はどうですか？ やはり全体的に余裕がある印象ですか？

坂本 全体的に見ると、売り手市場という言葉に惑わされ「就活は簡単」と思っているように感じます。しかしその結果、準備が足りない状態でいきなりESや面接を経験し、「簡単じゃないんだな」と実感するようです。たしかに、最近の昔ほどESでは落とさなくなっていますが、逆に面接は通りにくくなっています。じつは、以前ならば落としていた50点程度の評価のESでも通過させ、面接試験を受けさせる企業が増えているのです。

—それはなぜですか？

坂本 昔ほど多くの学生が受けにこないため、企業は辞退のリスクを考えて、一人でも多くの学生をキープしておきたいからです。だから、少し前なら落とすレベルのESも、その後の成長を期待して通しています。ここに落とし穴があります。学生は、ESが通過すると、そこに書いた自己PRや志望動機が認められたと思ってしまうのですが、本当に合格レベルの評価をもらっているとはかぎらないということです。だから、ESで書いたことを面接で話して落ちるんです。

—ESが通っても油断してはいけないということですね。

坂本 まったく油断はできません。実際、いまは二次面接くらいで落ちる人が多いです。なぜなら、一次面接は元気があるかとか質問に対して的確に答えられているかとか、形式的なところを見て、その次の二次面接になって初めてESの内容を細かくチェックする企業が多いからです。そのため、企業研究や自己分析がしっかりできていない人でも二次面接まではいけますが、そこで落とされてしまうんです。

——ということは、面接で落ちたからといって、面接の内容だけが原因とはかぎらないということですね。

坂本 面接の内容以上に、そもそもESの内容が悪かったということが多くですね。二次面接で落ちたら、ESの内容も見直す必要があります。

——「ESはいいんだけど、面接が苦手なんだよな……」じゃなくて。

坂本 ESが悪かったからこそ、面接に悪影響が出たんです。ESからつくり変えないと、面接突破は難しい場合もあります。つまり、ESの段階で完成度の高いものしておく必要があるということです。

——最初に土台をしっかりつくっておくんですね。

坂本 しかもESは、一次だけじゃなく二次、役員、社長面接でも全員に見られます。ESの内容が悪いと、第一印象も悪くなり、面接で話す内容も幼稚になってしまいます。

——だから、最初にちゃんとしたESをつくっておく必要があるんですね。面接で落ちてしまうという学生から相談を受けたときは、まずESを確認するんですか？

坂本 そうですね。自己PRに問題があるとか、志望理由の組み立て方に問題があるとか、ESに原因があることが多いので。逆にESがうまくつくれていれば、その後の面接もうまくいきます。

——うまくいく学生とうまくいかない学生の差はそこにあるんですね。